



# 療育手帳の向こう側

## 6. なかなか語られない内の声

坂口 伊都

### はじめに

前は、子どもの内と外との対応について書きました。子どもは何も考えずに毎日を過ごしているように見えますが、子ども同士や先生等の人間関係の中でいろいろ思案し、自分なりに対応しようと頑張っていることを理解していただきたいものです。

もちろん、大人も頑張っています。子どものために何をしていけばいいか必死に考えていると伝わってきます。

療育手帳の検査時に親御さんから、

「療育手帳を持っていて得になることはありますか？」と尋ねられたことがあります。

「損得ですか??？」

何を得だと表現しているのかわからずにいると、

「療育手帳を持っていなくても支援級や放課後等デイサービスの利用ができますよね」と続き、できれば療育手帳を持たずにいたいのだと伝わってきました。

中には「療育手帳をどうしても取る気になれず、申請を拒み続けて今になりました」と話す方もいます。葛藤を繰り返してきたとわかります。

そうかと思えば、1歳になるかならない頃に療育手帳の新規申請をされ、「この子のために早く療育手帳を取りたい」と言い、

「できることは何でもしてやりたいのです。少しでも早く取り組めば効果がでやすいと思うので」と前のめりで語る方もいます。この年齢だと、「まだ小さくて判断ができないので、経過を見ていきましょう」と援助者から言われることが多いのですが、藁をも掴む思いでいるのでしょうか。

子どもにしょうがいがあると告げられたら動揺し、しょうがいを受け入れるまでに5つの段階があるとされています（ドローター；1978）。

第1段階	ショック	頭が真っ白になる
第2段階	否認	間違いに違いない
第3段階	悲しみと怒り	何で我が子だけがこんな目にあわないといけないのだ
第4段階	適応	現実を受け入れていく
第5段階	再起	未来に向かって進む

当たり前ですが、この段階をきれいに流れるのではなく、行きつ戻りつします。何かショックを受けるような事柄は、しょうがい受容だけではありません。大きなトラブルに遭遇した時、同じような心の動きを体験したことがある方は多いのではないのでしょうか。

しょうがいがあるとわれ、子どもの将来を不安に感じ、どうしたらいいかわからないと焦る気持ちが起きるのは当然です。だからと言って「しょうがい」だから不幸でしかないと言い切れる人はいないでしょう。得になるかと言った方も、療育手帳を取る気になれなかった方も、できることはできるだけ早くと言った方も、子どもの将来がイメージできない不安が根底にあります。ご自身の気持ちの整理が追いついていないのかも知れません。今回は、心の内に焦点をあてて考えたいと思います。

## 見えない未来

子育てに将来への不安やトラブルはつきものです。親がいくら思い悩んでも、子どもがこの先どうなるかは誰にもわかりません。療育手帳を申請される背景に事故にあって、難しい疾患だと診断されてという方もいます。

対処療法しか治療の方法がないと言われて、

「これからどうなるかわからないから、今を大切にしています」という深く重い言葉を聞いたこともあります。

「本当に大変で」という言葉は、いろいろな親御さんから何度も聞きましたが、この方は大変だとは一度も口にしませんでした。「困っていることはあまりない」と笑って語る姿



に違和感を覚えました。

将来、何らかの症状が出る可能性が高いとドクターに言われているとお聞きすると、聞いているこちら側の胸が痛みます。この状況下で母の気持ちの吐露はどうしているのか、相談相手は誰になるのだろうと疑問が浮かびます。ご夫婦の会話に疾患の話題が上がることはないそうで、「私が通院や療育に対応しているから」と言い、「それに明るくしていないと、どんどん落ち込んでしまいそうで」と母の目が潤んでいきました。

本当は人目をはばからず大泣きをしたいのではないかと、どうしてと怒りたいのではないのでしょうか。

気丈に振舞うことで自分を保っているのですが、支援者側はその人の困りごとに向き合おうとするので、困っていないと言われるとどう手を伸ばせばいいかわからなくなります。支援者から、「一旦、終わりにしましょうか？」と提案されたこともあるそうです。

母の言動は笑顔で話し、困っていないと言われれば大丈夫なのだろうと判断される雰囲気もわかります。所々で目が潤む母からは、何かとてつもなく大きい何かと戦っているように見えました。相談援助職に疾患を治す力はありませんが、できることもあるはずです。

母が、今まで抱えていただろう言葉を投げかけてきました。

「私、上手く言えないから、わからないことも何を尋ねてもいいか、いけないのかわからなくて」と言い、これはどうか、あれはどう思うかと幾つもの質問が出てきました。全ての疑問に答えられるわけではないので、わからない部分は「何でそうなるのでしょうかね」と唸りあいました。一緒に悩んでいる時、この方は答えを求めながらも、独りではなく誰かと悩みたかったのではないのかと感じました。

人は大丈夫でなくても、「大丈夫です」と答えがちです。その人の語る大丈夫の背景は多様であると教えられました。常に耳を傾けることを忘れないようにしたいです。

## 意外

訪れたその親子は、しっかり者の母とほとんど喋らないおとなしい対照的なイメージでした。

母からの聞き取りから語られた親子関係は、

「私よりは父の方が話しやすいみたいです。父にはいろいろ言っています。私は、口うるさい所があって、父の方が優しいので」と言うので、母は厳しく、父は優しいタイプで父に甘えているの

かと思って聞いていました。

続いて「父には、割とズケズケ言っていますね」

ズケズケ？優しい父に何をズケズケ言うのだろう。

「例えば、どのような話しになるのですか？」と尋ねると

「そうですね。うちはお風呂洗いが当番制なのですが、父親はすぐに忘れてしないことが多いです。そうすると、またしてないじゃん、お母さんにばかりやらせて」と怒っているそうです。

私のイメージは間違っていました。この子は、お父さんっ子というより、お母さんが大好きで守ろうとしています。そして、母も厳しいというよりも家でも外でもよく働いているので、子どもとしては休ませてあげたいと思っているのかも知れません。

次は、この子話を聞いてみたくなり、母から聞いていた学校の様子を質問しました。

「〇〇部で頑張っているのだったね。練習きついでしょ。」

「はい、もう本当にきつくて大変です」と待っていましたと言わんばかりに「もう信じられませんかよ、本当に力仕事ばかりで」と続きます。

またもや意外。こんなに力説するとは。

前回の記録にも話している記載はなく、知らない人に気安く話をしてくれないのだろうと予測していました。この子が話したい話題は、聞けば話してくれるとわかり、勝手に決めつけてはいけないと反省しました。目の前の人のお話に耳を傾けているつもりでも、聞いていないものです。優しいという曖昧な言葉の中にどのようなエピソードがあるのか尋ねてみるのが大切だとわかりました。この回は、この親子の関係性を勘違いせずに聞き取れた気がします。

## 内の声



その人の印象でバイアスをかけず、聞き取る必要性を感じます。同じ出来事でも人によって感じ方が違います。例えば、いじめでは、いじめていた側はふざけていただけ、冗談だったと言い、いじめられていた側は深く傷つきながらも笑っていて、周りにいた大人達は遊んでいると思っていたと語られ、立場によって見えている景色や感じ方は変わります。

それは家族も同様で、父、母、上の子、下の子、祖父、祖母とそれぞれ立場、経験、世代、性別が異なり、大事にしているものも違い、感じ方も変わります。親は良かれと思ってしてい

ることで、子どもには迷惑でしかないと言う事も起こります。

例えば、子どもに発達面での遅れがあると、普通級、支援級、支援学校、どこに入るのがいいのか迷います。支援級ではなく普通級に在籍する、年少期に療育手帳を取れそうにないと言われたため科目別に少人数指導を受ける通級を利用、学年途中から支援級に入る、地域の学校から支援学校へ移る、小学校入学前の相談時に地域の小学校の支援級では、手厚くケアすることが難しいと言われ、支援学校に進学等、その子によって辿る道は違います。

「普通級にいた時は勉強について行けず、ずっと下を向いていましたが、支援級になってから上を向くようになり、笑うようになって別人のようになりました」

「子どものペースでできると、できた・わかったが増えたからだと思う」と語られていました。

子どもにとってどの道を選ぶべきか悩みますが、子どもの様子を見ようとするのが何よりも大事なのですね。

自分のことは自分が一番よくわかっていると思いがちですが、言われてみればいつもより表情が暗かったり、仕事や勉強に集中できなかつたり、何か別のことで気を紛らわせようとしていたりということの経験はないでしょうか。

「大丈夫です」を強調する、連呼する人は大丈夫ではないのだと感じます。困っていることはありませんと言われる方にも出会いますが、子育てはそんな簡単なものではないはずですが。

内の声は、実は本人も自覚していないことが多いと感じます。トラブルや悩み事に気を取られ俯いてしまう気持ちの時はなおさらです。他者から自分が意識していなかった質問を投げかけられることで、自分の中の一面を感じると、狭まっていた視野が広がった感じがする時があり、それは、大きな変化と言えるのではないのでしょうか。その質問は、援助者だから投げかけられることもあります。

大人よりも子どもの内の声は、言葉として表現することが難しく、言葉の遅れがあれば表出すること自体が難しく、感情の理解も未熟で、内の声に届くまでの距離感が大人よりも長い。だから、近くにいる大人と一緒に考えようとするのが子どもの力になり、コミュニケーションの助け船になりのだと思います。

